

英国ヨーク大学の授業が示唆するもの

田 淵 五十生
(奈良教育大学社会科教育教室)

Isoo TABUCHI
(Social studies education, Nara Universtiy of Education)

要旨：英国のヨーク大学に留学の機会が与えられた。筆者は、学生の立場から学部や大学院の講義を受けたり、逆に教員として講義を担当したりして、英国の大学でどのように教育が行われているのか具さに知ることができた。本稿は、筆者自身の体験と他学部で学ぶ日本人留学生に対して行ったインタビュー調査に基づいた、ヨーク大学の講義への参与・観察記録であるが、特に、大学の授業形態に焦点を合わせて報告を行い、日本の大学教育が学ぶべき点を明らかにした。

キーワード：英国の大学教育、大学教育の改善

1. はじめに

筆者は、文部省の在外研修で英国のヨーク大学に1994年8月から1995年7月まで留学する機会が与えられた。筆者の研究テーマは、「英国における多文化教育」であったが、「英国の大学教育」についても関心を抱いていた。したがって、滞在期間中、学部や大学院の講義に積極的に参加し、1995年の春学期には学部の学生を対象に「日本と教育」というテーマで講義を担当した。

本報告は、ヨーク大学を事例にした英国の大学教育についての参与・観察報告である。従来、英国の大学教育については、比較教育学の立場から文献による歴史的研究や制度的研究が主体であった。また、大学教育の実態については、カリキュラムやスタッフ構成等の統計や調査研究が中心で、大学の講義がどのように行われ、学生がどのように学んでいるのかという教育過程に踏み込んだ報告は非常に少なく、たとえあったとしても、例外的な「オックス・ブリッジ」の報告に終始している。ごく普通の大学で、どのような教育が行われているのかについて、学生と教師の両方の体験を通しての報告は管見する限り行われていない。

本報告では、まず最初に英国の大学制度とヨーク大学について簡単に素描する。次いで、筆者が受けた講義のなかから二つを選んで事例報告を行う。そして、ヨーク大学に留学している二人の日本人学生に対して行ったインタビュー調査の内容を紹介しながら大学教育や講義の実態について紹介する。最後に、筆者が実際に講義を担当した経験を踏まえて、英国の大学教育と日本の大学教育の比較を行う。以上の考察を通して、日本の大学教育の改善に若干の提言ができれば幸いである。なお、本稿に加筆した『〈体験〉国際理解と教育風土ーヨーク大学からの便りー』が、1998年3月にアカデミア出版会から刊行される予定である。

2. 英国の大学制度とヨーク大学

イングランドの大学は3年制だが、スコットランドの大学は4年制である。秋学期、春学期、夏学期の3学期制の大学もあれば、前期と後期の2学期制の大学もある。同じ大学でも、学部や学科によって授業形態が異なっている。したがって、「英国の大学教育の特徴は……である。」と

一律に論じられないのが、英国の大学の特徴だと言えるだろう。一つの例外（バッキンガム大学）を除き、96校のすべてが国立大学で、設立された時期により四つに分類できる。

第一は、オックスフォード大学やケンブリッジ大学に代表される、中世以来の伝統を誇る「古典大学」（Ancient Universities）である。理論的な研究が中心で、その過程で紳士の養成を行ない、政治家、外交官、学者、法律家、牧師などを輩出した。芝生の美しい四角い庭を囲むように、重厚な石造りの建物が並び、ステンドグラスの美しいチャペルが高く聳えており、大学が僧院から出発したことを物語っている。ここでは、今でも授業の多くは、教師と学生が1対1ないしは、1対2で学ぶチュートリアル（個人教授）で行われている。

第二が、19世紀末から20世紀初頭に設立された「市民大学」（Civic Universities）である。Civicとは、貴族や上流階級に対して普通の「市民」という意味である。これらの大学は、産業革命の結果、急速に発展した工業都市や商業都市、たとえばバーミンガム、リバプール、リーズマンチェスターなどの都市に設置された。ここでは産業革命と結びついた工学や経済学なども教えられた。堂々としたレンガ造りの建物で、「赤レンガ大学」（Red Brick Universities）と呼ばれている。高い時計台が聳え、窓枠が水平線に続く学舎など、日本の旧制の帝国大学の建築物の印象を与える。

第三が、「新大学」（New Universities）と呼ばれる新構想の大学で、1960年代のベビー・ブーム世代に対応するために設立された。ヨーク大学がその典型だが、サセックス、ケント、エセックス、ワービック、ランカスターなどの都市に設立され、スコットランドでは、スターリングに設立された。どの都市も大聖堂のある司教都市である。大学と教会は深い繋がりがあり、精神的なものが求められたのである。これらの新構想の大学は、広大な敷地に、近代的な鉄筋コンクリートの建物を建て、ガラス窓をふんだんに使ったので、しばしば「板ガラス大学」（Plateglass Universities）と呼ばれている。これらの大学では、コンピュータやバイオテクノロジーなど時代の要請に応えた学部や学科が置かれたので、「市民大学」を抜いて急成長している。

第四は、「地方大学」（Local Universities）である。1992年まで、大学は46校しかなかった。日本の4年制の大学が、国立、公立、市立合わせて586校（1997年現在）であるのに比べ10分の1以下である。けれども、1992年の教育改革で、実業専門のポリテクニクスや教員養成カレッジ37校が一挙に学位を授与できる大学（University）に昇格した。それらを「地方大学」、または「新・新大学」と呼び、戦後の日本の地方大学を「駅弁大学」と呼んだ経緯とよく似ている。ここでは、職業に結び付く、実用的な知識や技術が教えられている。

英国における大学の性格は、エリートの養成機関から「大衆大学」（Mass University）に変質しつつある。1960年代から80年代の労働党政権の下、英国社会の平準化が進み、労働者階級からも徐々に大学進学者が増加していった。それでも、大学は中産階級の色彩が強く、1992年以前、進学率は8%以下であった。そこが教育における民主化を達成した日本との違いである。しかし、1992年の教育改革で、大学生は同年齢層の15%に達し、現在では20%に迫ろうとしている。その他の高等専門学校や高等実業専門学校を含めると、いまや高級教育への進学率は30%に達している。

筆者の滞在したヨーク大学は、1993年に30周年を迎えたばかりの「新大学」の一つであるが、人口12、3万のヨークに設立されたのは、カンタベリーと同じようにアーチビショップ（大司教座）が置かれており、英国を代表する宗教都市だからである。古い教会附属の古文書研究所や建築学研究所が母体になって大学が設立された。

現在、学部学生約4500人、大学院院生約1500人、教員約820人を擁しており、留学生も約400名在籍している。筆者が所属したのは、教育学部（Department of Educational Studies）であるが、在籍するのは、大学院の院生と学部を修了して教職免許を取得するPGCE（Post Graduate Certificate of Education）の学生であり、学部学生は存在しない。（しかし、1994-1995年度から、学部の財源確保のために学生が在籍するようになった。）

3. 講義の参与・観察報告

筆者は、滞在中に、学部の講義を六つ、大学院の講義を二つ、PGCEの講義を一つ、留学生対象の講義を二つ、合計11科目受講した。本節では、「教育における論争問題」という新入生のための講義と、「英国における教育改革史」という2、3年生の講義について報告するが、報告内容は、ヨーク大学の教育学関係の事例であって、決して英国の大学を一般化しようとするものではない。

1. 「教育における論争問題」の事例報告

この講義は、教育に関わる論争問題を取り上げ、それを分かりやすく解説する授業である。取り上げられるトピックは、「初任者研修は役立っているかどうか」、「エイズ教育は必要であるかどうか」というような最近の話題で、新入生が教育について広い視野から考える講義になっている。

英語教育のメアリー・ボーステッド先生は、「英語は英国人だけのものか」と題して、ネイティブ・スピーカーである英国人の英語に近付けることを当然視していた従来の英語教育が見直されていること、オーソドックスな英語やスタンダードとしてのシェークスピア英語があるというイングランド中心の考えを改め、ノン・ネイティブ・スピーカーの英語も積極的に評価しようという動向があることなどを紹介していた。

化学教育の先生は、化学、物理、生物というアカデミックに依拠していた従来の科学教育観、すなわち科学の成果を希薄にして教えるのが教育であるという発想から、むしろ日常生活のなかの自然現象を取り上げ、その背後に存在する自然科学の法則に気づかせるような、新しい科学教育の教材例を紹介していた。講義の後半には、科学教育で大切な事柄を書いた9枚のカードを優先順位に従って並べる「ダイヤモンド・ランキング」というグループ・アクティビティを取り入れ、学生がいつのまにか嬉々として授業に参加していた。

また、教育社会学のバルミー先生は、「英国における職業教育の現状」と題して、「1988年の教育改革法」の狙いとするもの、それを受けてテクノロジーやコンピュータ中心の実業学校がどんどん設立されている動向、その動向に対してさまざまな批判が寄せられている現状など、きわめて現代的な論争を提示していた。“1988 National Curriculum”として有名な英国の教育改革は、単なるカリキュラム改革に留まるものではなく、一種の社会変革ではないだろうか。純粹理論では偉大な研究成果や研究者を輩出したにもかかわらず、英国が経済的な不振に苦しまなければならないのは、工学部や農学部のような応用科学や実学軽視の風潮があったからではないだろうか。したがって、この教育改革は、「ダンケルク精神」と「スパートニク・ショック」を合体させたような決意で、英国が生き残りを賭けて取り組んでいるのではないだろうか、などいろいろ考えさせられた。

いくつかの授業は、1年生にはあまりにも専門的すぎて消化不良を起こすのではないかという内容であった。ある先生の場合、1週間前の学内で開かれた学会で発表した内容をそのまま授業

にしており、私が教室に入ると、「今日の講義は先日の学会で先生に聞いていただいた発表内容を学生に分かりやすくしたものですので…」と言われ、退席したことさえあった。また、初等教育のローズマリー先生の講義は、自分の論文の紹介であった。明快な論理の構成をした内容に感動したが、学生はノートに落書をしたり、欠伸（あくび）をしたり、完全に退屈しきっていた。

けれども、大半の講義では、ディスカッションやグループ・アクティビティなどの参加型の学習を後半に取り入れ、学生を授業に参加させる工夫がされていた。日本の大学教師も学生に授業へのモチベーションを与える必要がある。

この講義科目は、いわゆる「教育学概論」に相当する。日本のそれと異なっているのは、系統性よりは各先生の専門性や問題意識が直接に提示されるオムニバス形式になっていることである。そして、三つの役割を果たしている。一つは、教育をめぐる最近の動向を紹介し、広く教育学に関心を持たせること。二つは、自分の学部や学科にどのような先生がいて、何を研究しているのかを知り、将来の自分の研究分野や指導教官を選ぶ参考にすること。三つ目は、それぞれの先生の研究方法を知る「研究方法の入門講座」の役割を果たしていることである。

2、「英国における教育改革史」の講義の事例報告

もう一つの講義は、リスター教授の「英国における教育改革史」である。これは、いわゆるゼミ形式で、毎週テーマが事前に知らされ、それに関する書物が3、4冊、多いときには7、8冊もレポーターに与えられる。担当者が調べた内容を発表するのだが、この授業では、先生が長々と補足説明をして、発表者を困らせる場合がしばしばあった。そのとき、学生は不快感をはっきりと態度で示す。なんでも教えたいという教師の「教育熱心」が、学生の出番を少なくしているのである。

学生たちの発表は、OHPを使用して約30分から40分かけて、内容もかなり充実していた。いい加減な発表もあったが、概して学生たちは発表の準備に時間をかける。与えられた文献以外にも目を通し、必ず自分なりの意見を付け加えていた。

その他の講義に参加して気がついたのは、多様な経歴を持つ学生がいたことである。英国の大学では、入学が認められると、その資格が数年間保障される仕組みになっている。学生たちは、外国旅行をしたり企業でアルバイトしたりして、社会経験を積むことができる。その制度を「イヤー・オフ」と呼んでいる。「教育における論争問題」を受講していたジェーンは、一年間フランスで英語を教えた経験を持っており、そのことがきっかけになって、現在教育学を副専攻にして学んでいる。ジェーンは、いつもの的衝いた発言をして、他の学生に知的な刺激を与えていた。この「イヤー・オフ」が最も長いのが医学部で、4年から5年の大学もあるという。社会の現実やその複雑な仕組みにふれるためには、このような猶予機関は非常に意味がある。この制度を導入すれば、日本の大学教育の質も向上するだろう。

また、大学は社会人を積極的に受け入れており、その学生たちをマチュアラー・スチューデントと呼んでいる。オックスフォード大学やケンブリッジ大学では数%だが、他の大学では10%から20%台を占め、なかには50%以上の大学もある。大学案内によるとヨーク大学は16%である。その意味で、英国の大学は生涯教育や生涯学習の拠点としての役割も果たしている。

3、授業の評価はどのように行われているのか

講義への出席は、この学部では問われない。学生たちは、毎週の講義内容を示したシラバスを見て出席か欠席かを決めるので、興味のない講義には出席しない。また、それが許される仕組みになっている。というのは、エッセーで成績の評価が行われるからである。

学生たちは、自分が最も関心のあるトピックを一つ選び、それについて3,000語から4,000語のエッセーを書けばいい。大事なのはエッセーの内容であって、出席点は問われない。講義は考えるヒントを与えるものという共通の理解である。何を学び、それを自分の言葉でどう論理だてて表現するのか、その結果が重視される。

学生たちは、エッセーの書き方をすでにシックス・フォーム（高校）で身に付けているが、大学でもう一回教えられる。教育学部では、キリアコウ先生が、先述した「教育学概論」に相当する「教育における論争問題」の授業で担当していたが、いわゆる学術論文の書き方と同じであった。その内容を要約して紹介したい。

エッセーでは、なによりもクリティカルであることと、オリジナリティを持つことが求められる。まず、自分が論じようとするトピックについて定義づけを行ない、過去、それがどのような文脈でディスカッションされてきたか、文献に当たって、代表的な賛成と反対の意見を紹介する。その際、議論にどのような問題点があったか批判的に検討する。さらに、自分の独創的な視点でアーギュメントを展開するのだが、意見を述べるときには、必ず意見をピンアップ（補強）するエビデンスやリーソニングを提示することが必要である。そして、思考や論理のプロセスを示しながら結論に至る、ということである。このような要領でエッセーを書くのである。

学生たちは、自分の専門分野について、エッセーを各学期に2、3篇、1年間で6、7篇、在学中に20篇前後書くことになる。ここに、スペシャリストを育てようとする英国の大学教育の理念が窺える。英国の学生は、セカンダリー・スクール（中等学校 11歳から16歳）を終えると、シックス・フォーム（17歳から18歳）で学ぶ。そこでは大学進学に関係する教科や科目を三つから四つ学ぶだけでいい。二つのシックス・フォームに体験入学して、心理学、地理学、社会学、歴史学などの授業を受けたが、その内容は日本の大学の教養部の水準であった。

英国のシックス・フォームや大学の授業を受けて感じたのは、戦後、日本の大学が、リベラル・アーツ（教養科目）を重視するアメリカの大学の影響をどれほど受けてきたかということである。幅広い教養を身につけるといふ、当初の目的は素晴らしかったのだが、それが高等学校の焼直しとなって、結局は私語が蔓延する状況になってしまった。英国の大学から学ぶことがいくつかありそうに思える。

4. 日本人留学生へのインタビュー調査

本節では、ヨーク大学に留学している二人の日本人の学生にインタビュー調査した内容を紹介しながら、ヨーク大学の教育について紹介したい。インタビュー調査は、1995年1月、筆者のヨーク大学での研究室で個別に行われた。

1. 言語学科の竹田奈津子さん事例

竹田さんは、日本の地方の教育養成大学の3年生で、文部省の教員養成大学・学部生海外派遣制度で来ている英語科の留学生である。日本では言語学に興味を持っていたが、教育学部の一般的な状況として、1年生では一般教養科目の単位を取るのが精一杯で、2年生では教育原理や教育心理学などの教員免許に必要な教職科目を取らなければならない。したがって、英語学や言語学などの専門科目はかじった程度でヨーク大学の言語学科に編入されたので、毎日が戸惑いの連続だったという。

最初の驚きは、入学通知書類に同封された「リーディング・アサイメント」と言語学科の「シラバス」であった。前者は、約30冊の書名が列举された冊子で、後者は、それぞれの講義科目の

9週間分の講義の概要が掲載された冊子である。これを見れば、講義の全体像が把握できるだけでなく、毎週どの講義の題目があるのか一目瞭然である。

指導教官は、「あなたはもう2年間以上も大学で勉強しているのですから、これぐらいの講義科目を受けてみたら…」と、「英語学」、「言語学入門」、「統語学」を列挙してくれた。そして、竹田さんが言語学を学びたいと伝えると、「それなら、この程度の講義に挑戦したほうがいい」と勧めてくれたのが「社会言語学」の講義科目であった。その結果、竹田さんは秋学科になんと4科目も受講した。ヨーク大学の言語学科では1学期に2科目受講するのが普通であり、多くても3科目までで、それ以上受講すると授業の準備ができなくなる。なぜなら、一つの講義科目がレクチャーとセミナーがセットになっているので、1科目取れば、少なくとも週に2回以上授業を受けることになるからである。

竹田さんにとって、秋学期、最も充実していたのは「社会言語学」の講義科目で、受講生で唯一人のノン・ネイティブの学生であったため、先生が親切に指導してくれたそうである。基礎知識がないので、授業ごとに参考文献を紹介してくれたという。また、セミナーのプレゼンテーションでは、「普通の発表者には、発表内容に関する文献紹介をしてもらっていますが、あなたの場合はその必要はありません。そのかわり、日本社会の現実に対応するような言語の特徴を探して、それを社会の構造と絡めて発表すれば、あなたのオリジナリティが発揮できますよ」と助言されて、竹田さんは、「日本の敬語と謙譲語」について発表し、その論点を膨らませて、エッセーを書き上げた。

この「社会言語学」の先生は非常に熱心で、前半は60分のレクチャーが週4回もあり、後半からは60分のレクチャーが1回と120分のセミナーが1回になった。日本の大学の授業に出る感覚で、何の準備もしないまま第1回の講義に出て、猛烈なカルチャー・ショックを受ける。「参考文献に挙げたあの本にはこのように書かれているが、あなたはどう思いますか？」と質問されて、「準備していかなければ何にもならないこと、授業に参加することがどんなに大変であるか初めて実感しました」と、その驚きを語っていた。

そのとき役に立ったのが、各週の講義の概要が書いてある「シラバス」で、どの本を事前に読めばいいのか、講義に対処する仕方が分かったそうである。竹田さんは、約30冊の課題図書のうち、秋学期で約10冊、目を通したという。主体的に準備して講義に臨んだからだろうが、「この秋学期で、日本の大学の講義の3年間分を学んだような気がします」と話していた。

2、問題意識を磨くセミナー

セミナーで竹田さんがまず驚いたのは、受講生の討論能力の高さである。意見を表明するとき、それを支えるエビデンスを準備し、リーゾニングをしながら、できるだけ論理的に話そうと努力していたという。「意見＝単なる感想」と考えていた竹田さんには、それが新鮮な驚きであった。受講生の討論能力は、大学で身に付いたというより、それ以前の長い教育の過程で培われたものである。シックス・フォームの授業は、大抵12人から15人のクラスで行われるので、先生やクラス・メイトとの議論の応酬には慣れている。

竹田さんが、次に感心したのは、ヨーク大学の学生の「問題発見能力」である。セミナーの討論が活発になるかどうかは、発表者の提起する「問い」の質にかかっている。発表者は、参考文献を批判的に読み込んで、「この論旨には飛躍はないか」とか、「これだけの事実でそのように断定できるのだろうか」とか、「筆者の研究方法は、このトピックに相応しいものなのか」というようなチャレンジな発題が行われるので議論は盛り上がる。「知識量においては決してひけを

取らないと思いますが、そのように自分で問題が創れるクリティカルな考え方が私にないことに気がきました」と話していた。

そして、竹田さんが最も驚いたのは、学生の間だけでなく学生と教師の間で、厳しい議論の応酬があったことである。授業中、先生が「これこれの理由で、私はこう思う」と、自分の考えを述べると、一人の学生が、すかさず「私はそうは思いません」と反論した。その大胆さに、竹田さんはびっくりする。それ以上にカルチャー・ショックを受けたのは、先生が喜んでその反論を受け容れたことである。そして、どうして反論するのか、その理由を丁寧に問いただして、その学生の理由づけに足りない側面を具体的に指摘して、他の学者の見解を紹介しながら議論したという。竹田さんは、そのとき大学教師の実力を思い知ったと述べていた。「知識や理論を即妙に使いこなして、学生と新しい知的創造をする能力、そこに大学教師の素晴らしさを感じました。今は、そのような大学の先生になりたいと思っています」とも語っていた。

ほとんどの日本人の留学生がセミナーに参加して驚くのは、発表者が提出した意見に対する、厳しい批判や反論である。その違和感をどのようにして克服したかについて、1年生からヨーク大学に正規に入学している2年生の堀さんは、「日本では、反論や批判はその人の人格を否定するように受けとめられますが、討論の場で提出された意見は、すでに客観化された対象なのでから、それに意見を加えるのは当然ではないかと考えるようになりました」と語っていた。

3、日本の大学教師とヨーク大学の教師

「日本の大学では、『この講義で何を学ぶのか』という学期全体のパースペクティブが与えられたことがなく、ただ『私の本をテキストに使用するので買うように』と指示されるだけで、到達目標など一度も明確にされませんでした」と竹田さんは話していたが、筆者自身、竹田さんの話しには、非常に耳が痛かった。筆者の立場を配慮して、「すみません、日本の大学の先生にこんなことを話して…」と躊躇していたが、「私のことは気にせずに、思ったことを話してほしい」ということで、「日本のあなたの大学と、ヨーク大学の4科目の講義を比較して、決定的な違いは何ですか」と質問を絞ってみた。

竹田さんは、「先生の学生に対する期待度の違いです。学生に期待するものが感じられると学生はそれに応えようとします。具体的にどのようなテーマを取り上げればいいのか、また、どの本を読めばいいのか、それを到達可能な形で示してくれます。課題が明らかになると、学生は努力できます。『社会言語学』の先生に感心するのは、学生一人一人の能力を的確に見抜いており、個々の学生に則して適切な指導をしていたことです」と述べていた。「日本の先生は、10人学生がいたら、その10人に同じような水準に到達させようと、それ以上は伸ばそうとしないような気がします。けれども、こちらの先生は、この学生は何が得意なのかを見極め、その優れた部分を伸ばそうとしているように感じます。そこが最も違うところだと思います」とも語っていた。

最後に、竹田さんは、次のようなエピソードを語ってくれた。「私の在学していた日本の大学の英語学の先生は、一度も外国へ行ったことがありません。それにもかかわらず、『英語の本質は、…だ』と教えていて、私もそのままノートに書き写していました。けれども、今では、そのことが滑稽に思えるようになりました。少なくとも、言語と社会は切っても切れない関係があります。その社会を知らないまま、『その言語の本質はこうだ』と断定できないはずです。もし、私が英国に来なければ、その先生の説をそのまま鸚鵡返しに生徒に教える教師になっていたと思います」というのである。このような批判的な見解は、竹田さんが「社会言語学」を学んだ成果であろう。それと同時に、体験や経験を通して多様な見方や考え方ができるようになったからだ

ろう。人は、経験に裏打ちされた実感があるとき、権威主義の矛盾を容易に見抜くことができる。

4、英文学科の鈴木純子さんの事例

もう一人、文学と教育学をコンバイン（副専攻）で学んでいる鈴木純子さんにもインタビュー調査をした。鈴木さんは首都圏の英語教育で有名な女子大学からの交換留学生で、日本でも英文のレポートの提出が求められていたので、英語力には自身がある。鈴木さんは、英文学科の「文学入門」の講義科目について報告してくれた。

この講義科目は、レクチャーとセミナーとチュートリアルの子三種類の授業形式を効果的に組み合わせた講義科目で、レクチャーは、複数の先生が、たとえば、「詩」、「小説」、「ドラマ」というように、自分の得意な分野で講義するオムニバス形式である。学科の新入生全員が受講するので、レクチャーは120人であったが、それが、12人から15人のセミナー・グループに分けられる。そこで、講義のトピックに則してその内容を深める討議を行ない、2週間に1回、2,000語のレポートを提出することになっていた。木曜日に課題が出されて翌週の火曜日に提出しなければならないので、秋学期の間はほとんどウィーク・エンドがなかったという。

けれども、徐々に勉強のリズムができてきた。それを可能にしたのが、先生と学生の子1対1の子チュートリアルである。そこでは、提出されたレポートについて、約20分間、先生と討議する。そのときチューターの先生はA4判1枚に、レポートに対するコメントを、①「全体の印象」、②「具体的にどこが評価できるか」、③「新しい発見があったか否か」というような項目に整理して、懇切丁寧に示してくれた。

そして、その総合評価を%で表わし、「ここでは二つのことを一つの文章にしているから論旨が曖昧なのですよ、このように書けば意図が明確になるでしょう」と具体的に指示してくれたので、鈴木さんは、何をどのように書いたらいいのか、徐々に要領が掴めるようになったという。そして、その都度%が上がって、気がついたら先生の手のひらの上に乗せられて、励まされていたというのである。

また、「エッセーのテーマが決まらなくて迷っていたときに、『Suggestion してもいいですか?』と、私の意志を確認したうえで、テーマの事例を挙げてくれたので、それが非常に有益で、しかも私の要求にぴったり合っていました」と話していた。鈴木さんの報告は、学生の主体性を尊重した場合の子チュートリアルの長所であろう。

チュートリアルの導入については、大衆化された日本の大学では望むことはできない。しかし、「文学入門」の講義科目から、授業改善の視点が与えられる。それは、レクチャーとセミナーを効果的に組み合わせた講義科目である。講義はたとえ100人をこえていても、セミナーは15人以下にして、複数の先生が講義科目と結び付いたセミナーを担当するのである。学生数の少ない国立大学では、このレクチャーとセミナーを相互補完的に組み合わせる講義科目は実現可能だろう。

120人の受講者が8つのグループに分れる「文学入門」のレクチャーには、いつも複数の先生が参加していたそうである。博士過程の大学院生である伊達夫妻も、その講義を聴講しており、次のように話していた。「学生たちはどの先生の授業が充実しているか敏感ですから、先生たちはふだんの授業に較べて、この授業では大変緊張していたようです。その上、同僚の手前があるので、下手なことは喋れませんから」と。筆者自身、そのような緊張感を伴う授業は嫌である。けれども、新入生を対象に入門科目の一つぐらいであれば、参加してもいいと思っている。学問的には自信はないが、一つのトピックについて、なぜ、それに関心があるのか、またそれをどのような研究方法で学んでいるのか、それを学生に懇切丁寧に話すことはできると思うからである。

5. おわりに

現在、日本の大学でも、いろいろな授業改革の試みが行われている。その主要な改善点は、次の4点である。その一つが、「課題図書目録」の配布である。その二つは、「シラバス」の提示である。その三つは、学生との「対話時間」(オフィス・アワー)の設定である。最後に、学生による「授業評価」の導入である。これらのすべてがヨーク大学で実施されている。「対話時間」の設定では、各先生の面談時間の一覧表が学期のはじめに掲示される。しかし、それが実施されるかどうかは別である。V先生の研究室を訪れる学生が、「今日も留守だった」と、落胆して帰って行く姿を何度も目にしたことがある。

学生による「授業評価」については、ヨーク大学では「授業評価用紙」が講義の最終日に配られる。そこには、(1)「この講義のよかった点」、(2)「この講義のまずかった点」、(3)「この講義の改善点」、(4)「その他の意見」が自由記述の欄になっており、最後に、(5)「総合評価」として、「EXCELLENT (優) GOOD (良) FAIR (可) POOR (不可)」から一つを選んでチェックする欄がある。もちろん、無記名である。学生は、その評価用紙を学部の秘書に届けることになっている。教員たちはそれを読んで、次年度どのように授業改善するのか、短い報告書にして学部長に提出しなければならない。したがって、第1から第4までの改善点は、新しい試みとして日本で喧騒されているが、ヨーク大学ではごく当然のこととして行われているのである。

ヨーク大学の英文学科や言語学科や心理学科の講義では、一つのトピックについて、レクチャーで概略が与えられ、セミナーで広い視点から討議されて、さらにチュートリアルで疑問点が深められ、その思考の過程をエッセーに書いて確認する仕組みになっている。そのようなサイクルを積み重ねていけば、トピックについて理解は深まり、自分なりの考え方が持てるようになるだろう。事実、学生たちの読書とエッセーにかかる時間は大変なもので、学生たちがアルバイトできない理由がよく分かる。インテンシブで密度の濃い専門講義科目を、各学期ごとに2、3科目、3年間の9学期間で約20科目学ぶのだから、学生は自分の専攻した学問分野では一応のスペシャリストになれるはずである。

けれども、実際に講義を担当して、英国の学生を観察して気になる点がいくつかあった。一つは、あまりにも専門に偏り過ぎていることである。シックス・フォームで3、4科目しかとらないうに、大学でも、専攻した分野の科目だけ学ぶので、どうしても視野が狭くなる。筆者が教えた経済学専攻のデイビットは、ミシガン大学の大学院の奨学生に合格するほど優秀な学生だが、「被爆体験と平和教育」について話したとき、英国が核大国であることを知らなかった。生物学と教育学をコンバインで学んでいるリーも同じような認識状況だった。

学生の視野の狭さを改めるために、主専攻と副専攻の二つを履修するのがコンバイン制度であるが、副専攻の講義やセミナーではどうしても集中力が希薄になってしまう。残念ながら、教育学部の講義(セミナー形式)はコンバイン学生が対象である。そのような学生たちを2学期間観察してきたが、セミナーでのプレゼンテーション(研究発表)以外、一度も発言しなかった手抜き学生が数人いた。

もう一つは、1年が3月期に分かれる期間の短さである。すでに明確な問題意識を持ち、自分で研究をじっくり深めたい学生には、9週間という学期は短すぎる。次から次にトピックが与えられて集中的に学ぶのは、中距離走の繰り返しのようで、マラソン選手の養成には不向きである。研究はどちらかと言えば、長距離走である。

以上、日英両国の大学教育について比較考察を行ってきたが、英国の大学教育から学ぶべき

点について、授業形態に絞って一つだけ指摘しておきたい。それは、筆者が「三方向学習」(スリー・ウェイ)と呼んでいる、三種類の知的な啓発場面が英国の大学の講義に存在することである。「一方向学習」(ワン・ウェイ)とは、教授者から学習者への「一方通行」の学習形態である。「二方向学習」(ツー・ウェイ)とは、「ワン・ウェイ」学習に加えて、教授者と学習者の間に双方向の意思疎通が行われる授業形態である。そして、「三方向学習」とは、「ワン・ウェイ」学習と「ツー・ウェイ」学習に加えて、学習者の間で相互啓発が保障される授業形態である。

日本の教育では、従来、学習活動は個人的な営みと理解され、最終的には個人の自律ないし自立が目標とされてきた。しかし、教育の過程は、他者との意見交換を通して自己の意見を明確にし、他者との関係性のなかで自己の立場を確立していく営みである。それは大学教育でも例外ではない。畢竟、教育とは集団的な営みである。それを可能にするのがレクチャーやセミナーやチュートリアルを組み合わせた「三方向学習」である。

参考文献

- 1) V.H.H. グリーン 安原・成定 訳『イギリスの大学 -その歴史と生態-』 法政大学出版局 1994
- 2) 民主教育教会 『イギリスの大学事情』(「IDE 現代の高等教育」385号) 1997年3月号
- 3) 中岡哲郎 『イギリスと日本の間で:ケンブリッジの日記から』 岩波書店 1982年
- 4) 藤原正彦 『遥かなるケンブリッジ -数学者のイギリス-』 新潮社 1991年
- 5) 中野葉子 『オックスフォードの贈り物』 廣済堂 1995年
- 6) 川上あかね 『わたしのオックスフォード』 晶文社 1995年
- 7) H. パーキン 新堀通也監訳 『イギリスの新大学』 東京大学出版会 1979年
- 8) 清水宏吉 『変わりゆくイギリスの学校』 東洋館出版社 1994年
- 9) UNIVERSITY OF YORK "ANNUAL REVIEW 1995-1996" 1995
- 10) THE TIMES "GOOD UNIVERSITY GUIDE 1994-1995" THE TIMES 1994